平成28年度

全国中学生
人権作文コンテスト

横浜市大会
作文集

Human Rights

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

横浜市教育委員会

平成28年度　全国中学生人権作文コンテスト　横浜市大会作文集

平成28年度

全国中学生人権作文コンテスト

横浜市大会作文集

はしがき

昭和二十三年（一九四八年）十二月十日に国際連合総会で世界人権宣言が採択されたことを記念して、毎年十二月四日から十日まで人権週間が設けられています。

これにあわせて、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会と横浜市教育委員会の共催で「全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会」を実施しています。

本コンテストは次代を担う中学生に、人権問題についての作文を書いてもらうことにより、人権尊重の重要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的としています。

本年度は、一四〇校、六〇、二〇九編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

コンテストに寄せられた応募作品はいずれも中学生らしい感性に富み、人権問題について、自ら真剣に考えて意見を述べたものばかりで、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。

この作文集は、校内審査を経た七九八編から、一次審査で六四編、二次審査で五十編を選考し、さらに最終審査で最優秀賞、優秀賞に選ばれた十八編を収録したものです。より多くの方々にお読みいただき、身近な生活の中で人権尊重の輪が広がることを願ってやみません。

終わりに、コンテストの実施にあたり多大な御尽力をいただきました、審査に関わられた先生及び多くの関係者の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

平成二十八年（二〇一六年）十一月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
（横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局）
横浜市教育委員会

【審査講評】

第三十六回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、市内一四〇校から六〇、二〇九編の作品を御応募いただき、ありがとうございました。また、参加された各校の先生方におかれましては、熱心に御指導いただき、また審査にあたられましたことに厚く御礼申し上げます。

日ごろの自らの体験を通じて感じたこと、考えたことを人権の視点から見つめ直し、一つの作品としてまとめ上げた中学生の皆さんの意欲と努力に心から敬意を表します。

応募作品のテーマは、いじめなど子どもに関するもののほか、戦争と平和、障害者、環境問題など幅広い分野から寄せられました。また、今年は障害をテーマとした作品が多く寄せられました。

作品の多くは、家族や友人、地域の人との日常のふれあいを通じてのふとした気づきや心の動きを素直に表現しており、その感覚にはっとさせられる作品もありました。

中学生の皆さんが人権作文を書くことで培った「人権の視点」を、これからも永く持ち続けてくださることを願っております。

横浜市大会においては、校内審査を経た作品について、市立中学校国語研究会の先生方による一次審査、教育委員会事務局指導主事による二次審査を行い、最終審査で最優秀賞など各賞を決定いたしまし

た。最優秀賞のうち、「続けていく『力』」「強さ。優しさ。よりそう心と心」「社会人としての意識」「心の中にある差別」「『袋叩き社会』を考える」「こころのバリアフリー」「一人ひとりの人権」「弟の気持ち」「『人の幸せ』を支える」を神奈川県大会の優秀賞として推薦いたしましたことを御報告申し上げます。

審査員の皆様には、御多忙の中、審査に御協力いただきましたことに改めて御礼申し上げます。

最後に、この作文集が、中学生のみならず、広く市民の皆様が人権について考えるきっかけとなれば幸いです。

審査委員長　坂　田　清　一

（横浜人権擁護委員協議会会長）

目次

はしがき
審査講評
入選者紹介……1

最優秀賞

●横浜市長賞
続けていく「力」
横浜市立深谷中学校……一年　二本柳姫乃（にほんやなぎひめの）……7

●横浜市教育長賞
強さ。優しさ。よりそう心と心
社会人としての意識
横浜市立仲尾台中学校……三年　黒川智史（くろかわさとし）……10
横浜市立鶴ケ峯中学校……二年　渡辺剛史郎（わたなべこうしろう）……13

●横浜人権擁護委員協議会長賞
心の中にある差別
「袋叩き社会」を考える
こころのバリアフリー
横浜市立東山田中学校……三年　鈴木沙彩（すずきさや）……16
横浜市立南高等学校附属中学校……三年　南部登太（なんぶとうた）……19
横浜市立日野南中学校……二年　野下茉花（のしたまな）……22

●横浜市人権擁護委員会長賞
一人ひとりの人権
弟の気持ち
「人の幸せ」を支える
横浜市立釜利谷中学校……二年　佐々木可帆……26
横浜市立南高等学校附属中学校…二年　神明杏……28
横浜国立大学教育人間科学部
附属横浜中学校…三年　宮下ひな乃……31

●横浜DeNAベイスターズ賞
誰もが出来ること
横浜市立十日市場中学校……一年　大島沙羅……34

●横浜F・マリノス賞
「起立性調節障害」を知っていますか
横浜市立軽井沢中学校……三年　鴨野亜季子……36

●横浜FC賞
幸せの源
横浜市立東山田中学校……三年　髙部海音……39

●横浜ビー・コルセアーズ賞
耳で聞く、目で見る
横浜市立谷本中学校……二年　中村穂野香……42

優秀賞

祖母から考える高齢者問題　横浜市立東鴨居中学校……三年　杉山由奈……45
本当の不自由とは　横浜市立上永谷中学校……三年　鈴木菜々子……47
「普通」を捨てる　横浜市立南希望が丘中学校……三年　種石まりあ……49
「外見で決めつけるのは…」　横浜市立矢向中学校……一年　森山優凪……52
心を越えた架け橋　横浜市立笹下中学校……二年　林榕艶……54

参加校紹介……56

応募状況……58

入選者紹介（敬称略　氏名五十音順）

最優秀賞（横浜市長賞）

二本柳姫乃（にほんやなぎひめの）　続けていく「力」……横浜市立深谷中学校　一年

最優秀賞（横浜市教育長賞）

黒川（くろかわ）　智史（さとし）　強さ。優しさ。よりそう心と心……横浜市立仲尾台中学校　三年

最優秀賞（横浜市教育長賞）

渡辺剛史郎（わたなべこうしろう）　社会人としての意識……横浜市立鶴ケ峯中学校　二年

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

鈴木（すずき）　沙彩（さや）　心の中にある差別……横浜市立東山田中学校　三年

南部（なんぶ）　登太（とうた）　「袋叩き社会」を考える……横浜市立南高等学校附属中学校　三年

野下（のした）　茉花（まな）　こころのバリアフリー……横浜市立日野南中学校　二年

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

佐々木可帆（ささきかほ）　一人ひとりの人権……横浜市立釜利谷中学校　二年

神明（しんめい）　杏（あん）　弟の気持ち……横浜市立南高等学校附属中学校　二年

宮下（みやした）ひな乃（の）　「人の幸せ」を支える……横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校　三年

最優秀賞（横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞）

大島（おおしま）　沙羅（さら）　誰もが出来ること……横浜市立十日市場中学校　一年

最優秀賞（横浜Ｆ・マリノス賞）

鴨野（かもの）亜季子（あきこ）　「起立性調節障害」を知っていますか…横浜市立軽井沢中学校　三年

最優秀賞（横浜ＦＣ賞）

髙部（たかべ）　海音（かのん）　幸せの源……横浜市立東山田中学校　三年

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

中村穂野香（なかむらほのか）　耳で聞く、目で見る……横浜市立谷本中学校　二年

優秀賞

杉山　由奈（すぎやま　ゆうな）　祖母から考える高齢者問題……横浜市立東鴨居中学校　三年

鈴木菜々子（すずきなこ）　本当の不自由とは……横浜市立上永谷中学校　三年

種石まりあ（たねいし）　「普通」を捨てる……横浜市立南希望が丘中学校　三年

森山　優凪（もりやま　ゆうな）　「外見で決めつけるのは…」……横浜市立矢向中学校　一年

林　榕艶（りん　ろんいえん）　心を越えた架け橋……横浜市立笹下中学校　二年

入賞

菖蒲　美緒（あやめ　みお）　昔のあたりまえを今の常識にしない……横浜市立小田中学校　一年

上田ひびき　みんな違ってみんないい　……横浜市立保土ケ谷中学校　一年
遠藤みづほ　勝負……横浜市立森中学校　三年
大畠　実紗　「障がいは生活の一部」……横浜市立大鳥中学校　二年
小笠原健斗　身近におこる人権侵害……横浜市立中和田中学校　三年
神谷　綾音　偏見、差別をなくすための道　……横浜市立早渕中学校　一年
河波　敦子　「幸せの黄色いメロン」……横浜市立南高等学校附属中学校　二年
菅野　雅子　Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ，ｔｏｏ．　……横浜市立岡津中学校　三年
木寺　深央　オリンピックを違う視点から見て……横浜市立日野南中学校　三年
清川　瞳生　かけがえのない先生……横浜市立早渕中学校　二年
黒木　彩乃　ヘルプマークについて……横浜市立田奈中学校　三年
午菴　琴音　強さと優しさと勇気と…　……横浜市立日吉台中学校　二年
江夏　美穂　遠くて近い国　……横浜市立南希望が丘中学校　一年

小瀬村駿人（こせむらはやと）　命……横浜市立金沢中学校　二年
小堂　佳波（こどう　かなみ）　トマト……横浜市立大綱中学校　二年
小林　宗也（こばやし　そうや）　ブラックチョコレート……横浜市立南中学校　三年
治々和　凜（じじわ　りん）　夢のために……横浜市立大鳥中学校　三年
須田　深月（すだ　みづき）　いろいろな人の目線になる……横浜市立野庭中学校　三年
田井亜紗美（たい　あさみ）　わかり合う大切さ……横浜市立高田中学校　二年
田井佑季奈（たいゆきな）　気付かされたこと……横浜市立市場中学校　一年
高橋　凪沙（たかはし　なぎさ）　曾祖母との思い出……横浜市立港南中学校　二年
谷　和華（たに　のどか）　なっちゃんが気付かせてくれた事……横浜市立中川中学校　三年
田村　芽来（たむら　めぐ）　黄土色のヒマワリ……横浜市立いずみ野中学校　三年
出村　優羽（でむら　ゆうは）　障害者差別について……横浜市立岡津中学校　二年
野村梨里華（のむらりりか）　おばあちゃんの彼氏は…。……横浜市立緑が丘中学校　三年

鳩野（はとの）　由依（ゆい）　大事な友達 …… 横浜市立名瀬中学校　一年
平本（ひらもと）　真咲（まさき）　思いやりで保たれる社会 …… 横浜市立南瀬谷中学校　二年
藤野（ふじの）帆乃夏（ほのか）　笑顔がおしえてくれたこと …… 横浜市立田奈中学校　三年
政井（まさい）　海音（みのん）　平和が目に見える社会をつくろう …… 横浜市立もえぎ野中学校　一年
松中（まつなか）つばさ　一人ひとりの個性 …… 横浜市立中和田中学校　三年
吉川（よしかわ）　花（はな）　声に出す前に …… 横浜市立山内中学校　三年
脇山（わきやま）菜穂子（なほこ）　男女のわくにとらわれない …… 横浜市立篠原中学校　二年

最優秀賞（横浜市長賞）

続けていく「力」

横浜市立深谷中学校　一年
二本柳（にほんやなぎ）　姫（ひめ）　乃（の）

「うるさい、だまれ。」大きな怒り声にバスの中の時間が一瞬止まったように思えた。

私は習い事に通うためにバスを二回乗り継ぎ、一番奥の席に座っていた。読んでいた本を落としそうになるぐらい心臓がどきんと飛び跳ねた。何が起きたのだろう。声がした前方へ目を向けた。初老の男性が、少年に向かって怒っていた。

「うるさいんだっ、おまえは。」二度目の怒り声に周りにいた人は、男性や少年に向けていた目線を床や窓に移してしまった。みんな何ごともなかったように誰一人として少年にも男性にも声を掛ける人はいなかった。

私は少年を何回か見かけたことがあった。彼は障がいを持っていて、いつも決まった席に座り、同じ言葉を大きめな声で繰り返し唱えている。同じ席が空いていないと少し不安そうに、他の席に座っている。男性は初めて見る人のようだ。一目でイライラしているのが分かる。少年がいつも座っている席に腰かけていた。少年はその席が空いていなかったからであろう。隣の席に浅く座っていた。前後に体をゆらし、男性の二度目の怒り声に、ついに「あーあーあー。」と強く体をゆらしてパニックになってしまった。さらに周りの人は違う空間にいるように誰一人として少年に声をかけたり、男性に注意をしたりする人もいなかった。私も同じだ。何も

できずにいた。

小さな頃、私の通っていた保育園の向かい側と、隣に小学生から高校生の障がいのある子どものデイサービスの事業所があった。運動会やバザー等、一緒に活動することもある。皆穏やかに日々を過ごしていたのを憶えている。他の習い事で使う地下鉄も事業所や作業所が近くにあることもあり、車両で一緒になることもよくある。私には日常のことで、少年の行動も、私がバスや電車で読書することも、同じく変わらない普通のことなのだ。

以前に私の母は障がい者の方たちと一緒にパン屋さんに勤めていた。パンの生地を分割したり、形成したり、母より上手な方が何人もいらしたそうで、毎日同じことをきっちり繰り返して過ごしていたそうだ。障がいを持つ人にとって普段と違うことが起こったり順番が変わったりするだけでも、とっても不安になってしまう。バスや電車に乗ることも、重い障がいを持つ人にはとても不安なことだ。何かを唱えたり、同じ行動をとることは、とても安心できるのである。

少年が繰り返していた言葉が、どうしても気になってしまうならば、優しく「小さな声で言う。」等、声をかけると小声で唱えてくれる。

私はそのことを男性に知らせなくては、少年に声をかけてあげなくては、と思うのに隣の人に通して下さいと言えなかった。

喉の奥が苦しくなった。少年の不安な気持ちや私が彼の家族だったらどんなに切ないだろうと胸が痛くなった。

私には障がいを持つ祖父と祖母がいる。祖母はあまり歩けず、すぐ足が痛くなってしまう。病院の帰りにバ

スで座れなくて辛かったと話を聞くだけでも切なくなり、そんな時に誰かが席をゆずってくれれば良いのにな、と考えてしまう。

少年の不安な気持ちや彼の家族を思うと、私は行動に移すべきだった。迷っている間にバスは終点に着き、みんな何ごともなかったようにバスを降りて行った。その日はずっとバスでのことが頭から離れずに後悔していた。

母が夕食の時に「なにかあったの？」と聞いてくれた。私は自分が行動できなかった恥ずかしさで話せないでいたバスでのことを話した。母は笑って「そう思えたことが素晴らしいね。」と言ってくれた。「次はできるよ。お母さんは、あなたが誇らしい。」と頭をさっとなでてくれた。喉の奥が苦しくなって、鼻の奥がツンとして、私は泣いていた。

世の中で、私が体験したことは日常でたくさんの形を変えて起きていると思う。私のように心で思っていても行動できないでいる人はたくさんいるだろう。私は認めてもらうことで勇気を得た。同じ事が起こることはもうないかもしれないが、障がいを知ってもらうこと、同じ気持ちを持つ人を認める心。初老の男性は障がいを持たない人にも怒っただろうか、家族に障がいを持つ人がいても怒っただろうか。

もっと色々、知ることで私達は選択肢が広がり、人を尊重し合えるのだと思う。

私はもっと知識を広げ、それを伝え、人々が尊重し合える世界を広げていきたい。それは決して容易なことではないだろう。だけど続けていくことが「力」だと信じている。

最優秀賞（横浜市教育長賞）

強さ。優しさ。よりそう心と心

横浜市立仲尾台中学校　三年
黒川智史（くろかわさとし）

昨年の冬、人生が変わった。

僕は学校の職業体験プログラムで、障害者作業所での職業体験をした。作業所では、様々な程度の障害者の方々が集い、切手貼りからタオルの仕上げ、箱づくりなどの軽作業を中心に朝はやくから夕方まで行っていた。とはいえ、皆一様に同じ作業をするのではなく、その障害の程度や作業の難易度によって部屋とグループを分けて仕事をする。

朝、作業所に出勤してきた利用者の方々は、作業の開始前に僕達に声をかけてきてくれた。「中学生？」「どこ中の人？」「お茶ほしい？」まだ不慣れな僕に色々な形の心遣いをいただいて、感動してしまった。こんなにも慮ってもらい、優しく仲間に引き入れてくれた心の広さに思わず泣きそうになってしまった。

そして、作業開始である。利用者の方々の先刻までの朗らかで和やかな表情はすぐに引き締まり、やる気にあふれた頼もしい表情に変わった。僕も「仕事」に就かなくてはならない。

僕達の担当した「切手貼り」の作業は、コツをつかむまでに時間がかかり、中学生は利用者の方々に手とり足とり教えてもらい、三十分ほどかかってコツをつかんだ。「切手はここに。シールはその下だよ。」「速いわね

え、負けるもんか。」利用者の方とのやりとりを通して、なんとか戦力になれたと思う。あの時、丁寧に作業のいろはを教えていただいたことで、利用者の方一人ひとりとの距離が縮められたと思う。

昼食後は、「箱づくり」である。エンジンオイルのパッケージを組み立てるのだ。説明に従って作業を進めているうちに、事件が起きた。そしてそれは、予期せぬうちに起こったことだった。利用者どうしのけんかがはじまったのだ。

状況をぼんやりと見つめる人もいれば、スタッフに抱きついて泣く人もいた。「怖い。」と走り回る人もいれば、仲裁に入ろうとする人もいた。幸いにも長くは尾を引かずすぐに仕事に戻れたが、僕達には少なからず動揺があった。そもそも、自分達が担当するエリアで周囲を見て、仕事を調整すれば良かったのだが、僕達は自分の作業に没頭しすぎた事で要求以上の量の仕事を任せることになってしまった。利用者の一人ひとりにルーティーンがあり、スタイルがあり、ペースがある。それを破られることは不快極まりない行為なのだ。やはり、視野を広く保てず、自分の都合だけで物事を判断してしまったがゆえの結果だったのだと感じ、反省すべき行動であったと深く胸に刻まれた。

そして、僕の職業体験は終わった。あの一日を通して障害をもつ人が屈託のない笑顔で人を迎える優しさを持っていること、時に人によりそう強さを見せること、感情があふれてしまうような時でも、どこかに思いやりの心があること。学んだことの多くは自分の中にあった障害者への差別、偏見の意識を根こそぎ取り除いてくれたと感じた。また、いつでも笑顔を絶やさずに問いかけ、諭してくれる存在のスタッフの方々には、自分の辛さや苦しさをもねじ伏せて日々そばにいてあげる優しさがあり、決して手を上げない冷静さがあり、心の清らかさがあった。

今、僕は高校入学に向けた長い長い受験勉強に挑もうとしている。めげそうになる時に、投げ出しそうになる時に必ず思い出す言葉がある。それは、ある利用者の方の言葉だ。

「難しいことも、辛いことも楽しむの。すると、元気になるわよ。」

最優秀賞（横浜市教育長賞）

社会人としての意識

横浜市立鶴ケ峯中学校　二年
渡辺（わたなべ）　剛史郎（こうしろう）

先日、新聞に次のような特集記事が載っていた。

「ある共働きの夫婦に子どもが産まれた。奥さんはバリバリのキャリアウーマンで、育児休業を取るつもりはなく、『プロ（保育園）に任せようよ。』と言ったが、夫の方は逆に『三歳までは親の愛情たっぷりに。』と考えていた。二人で話し合った結果、夫の方が育児休暇を取ることにした。上司は『困る。』と難色を示したが、夫は、『休んだって大丈夫。』と考えていた。育休法は取得者の不利益扱いを禁じているはずだったからだ。しかし、復職後、最初の人事評価で上司に言われたのは、『ずっとまじめに会社に来た人と、一日も来なかった人を一緒にするわけにはいかない。』という言葉だった。『育休法を知らないんですか。』とかみついたが、評価は変わらない。それまで同期の中で一番早く出世していたが、その後、昇進は同期より四、五年遅れとなり、六年後の次男誕生時には、育児休暇の取得を断念せざるを得なかった。」という記事だった。

「男女共同社会参画法」が施行されたのは今から十年以上も前のことだが、いまだに現実社会の中で男性の育児休暇取得については風当たりが強く、充分な理解を得られていないというのが現状であるようだ。

この記事を読んだ父は、「社会の中もそうだけど、実は家庭の中だってまだまだ意識を変えていかなければい

けないところは多いと思うよ。日本の父親はまだまだ家庭の中で家事や育児に積極的に関わっているとは言えないからね。」と言った。

ぼくは、学校から「面談」や「授業参観」のお知らせが配られると、父か母のどちらか早く帰宅した方に渡す。そうすると両親は、誰が出席できるかについて話し合う。例えば母が、

「私は来週は残業続きでどうしても休めないし、早退も難しい。」

と言えば、父が、

「じゃあ自分が行くよ。来週なら何とかなりそうだから。」

と返事をして、お互いに調整をしている。だから、我が家では、いろいろな行事に父と母のどちらかが参加するか二人そろって参加するかのどちらかが当たり前のことになっている。ただ、周りを見ると、それは全然当たり前のことではないようだということが分かる。

「でも、自分も昔は全然家のことなんかやらなかったんだよ。」

と父は話した。ぼくが産まれるずっと前、父は仕事が忙しく、半年に一日しか休まなかったり、過労死の基準をはるかに超えるようなペースで仕事をしていたらしい。

「あの頃は仕事しかしていなくて、家のことは何もやっていなかった。全部お母さんに任せっきりだったんだよ。でも、お前が産まれる二年ほど前、お母さんが体調を崩して入院したことがあった。その時病室のベッドで横になって眠っているお母さんの寝顔を見ながら、それまでの生活を改めることに決めたんだ。」

ということだった。それから半年後、父は十年以上勤めていた会社を退職し、新しい仕事に就いた。新しい職場を選ぶときに優先したのは、給与や待遇面よりもむしろどれだけ、時間や休みのゆうづうがきくかというこ

とだったという。

「まあ、おかげで生活の方はそんなにラクじゃなくなったけどな。」

父は笑いながらそう言った。

元々、父は一人暮らしの経験もあり、料理や洗濯等、一通りの家事はできる。母が忙しいときには父がご飯を作ることもしょっちゅうあるし、塾に車で迎えに来てくれるのも父だ。

「いくら法律を作ったって、社会や家庭の中での意識が変わらなければ、難しいのかもしれないな。だって、家事全般を奥さんが全部こなして、その上で男性と同じように外で働けって言ったって、どう考えても無理があると思わないか。」

父にそう言われてみると、なるほど、確かにそうかもしれないなという思いがしてきた。

社会の人たちに気づいてもらいたい。男性も女性も変わらない。みんな同じ人間なんだということを。だから、この男女共同社会参画法をもっと大事にしていかなくてはいけないなと改めて感じました。

これからぼくは、男女差別を受けている現場に立ち会ったりするかもしれない。その時は迷わずにこう言いたい。

「男女関係ない。みんな同じ人間なんだ。」

と。

そして、これから先の日々の生活の中で、今まで以上に積極的に家事に取り組んでいきたい。

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

心の中にある差別

横浜市立東山田中学校　三年
鈴木沙彩

「ナンカコワイネ。」

となりにいた友達のその一言は、私がそれまで意識していなかった差別の存在に気づかせてくれました。

それは、ある日の遠征の帰り道でのことでした。

私は、部活の友達と二人で電車に乗っていました。降りる駅まで、あと四駅。その時、私が乗っている車両に一人の男の人が乗ってきました。その人は、何かをぶつぶつとつぶやきながら、そわそわとしています。そして、周りを少しにらむような目で見ていました。障害がある人だったのです。

すぐに、同じ車両に乗っていた一人の女の人が、となりの車両へ移動しました。それに続いて、近くに立っていた女の人も、急ぐように空いている席に座り、下を向きました。車内には、冷たい空気が流れていました。ここにいる人がみんな、男の人を気にしていないように振る舞っている、そのように感じられました。

私は友達と顔を見合わせました。友達は、声は出さずに、まゆをひそめて、口を動かしてみせました。

「ナンカコワイネ。」

私はうなずきました。なんか、怖い。そして、なんとなく、「この車両に乗らなければよかったな。」と思いま

した。

その電車を降りてからしばらくして、私はふと、電車の中での自分の気持ちを振り返りました。

思い返してみれば、私はあの男の人に何もされていない。何かを言われたわけでもなく、あの人が悪いことをしたわけでもなく、たまたま同じ車両に乗り合わせて、立っていただけでした。それなのに、どうして避けたのだろう。どうして嫌だなと思ったのだろう。

そこで気がつきました。私はあの男の人をなんとなくの心で「差別」していたんだ、と。

そのことに気づいてから、私の頭の中は、あの男の人のことでいっぱいになりました。もし私があの人の立場だったら、どんな気持ちになるだろう。知らない人になぜか避けられて、嫌な顔をされるなんて、悲しいや寂しいだけでは言い表せないに決まってる。それでもし、毎日そんな目にあっていたとしたら。私は胸がしめつけられるような気持ちになりました。なんか怖い。自分の心にある、その「なんか」が、誰かを傷つけてしまうことに気がつきました。

小さな頃から、私は、人はさまざまでみんなが平等だと教わってきて、知っています。学校の道徳の時間にも、本や映像などを通して、それを学んできました。そして、今世界には、さまざまな差別問題があります。障害者差別、外国人差別、職業差別…。今も苦しんでいる人がたくさんいます。

でも、これらの差別はどれも自分からは遠く、自分が差別にかかわることはあまりないと思っていました。なぜ差別をするんだろう、みんな同じ人間なのに。他人事だと思っていました。でも、それは違っていました。

差別とは、なんだろうか。

私の電車での体験から、新しくわかったことがあります。それは、差別は、心の中に生まれるもので、身近

にあるということです。自分にはそのつもりがなくても、ふと思ったことが、誰かを傷つける差別の気持ちなのかもしれません。そしてもし、差別が心の中で生まれるのなら、それは心の持ち方次第でなくすことができると思うのです。

今、差別で苦しむ人を少しでも減らすために、私ができること。それは、まず世界にはさまざまな人がいる、ともう一度知ること。そして、いつも周りにいる一人一人の気持ちを考えて、それぞれを認めること。そうすることで、いろんな人に対する意識を少しずつ変えていって、自分の心の中にある、なんとなくの差別をなくしていく。きっとそれが、誰かの人権を守ることにつながると、私は思っています。

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

「袋叩き社会」を考える

横浜市立南高等学校附属中学校　三年
南部登太

僕はよく、動画投稿サイトを視聴する。

ある日、サイトにある県議会議員の会見を面白おかしく加工した動画を見つけた。面白そうだなと思って見てみると、議員の会見の映像が編集され、様々なエフェクトが面白おかしくつけてあった。その動画があまりに面白かったので、僕はその動画を母に見せた。しかし母は、その動画を見たとたんに顔を曇らせ、こう言った。

「投稿者やコメントした人が特定されにくいからって、皆でこんな事を平気でできるなんて怖いね。」と。

そんなこと考えもしなかった。ただ僕は、その面白さにひかれて、楽しんでいただけだ。

でも冷静になってみると、この動画を作った人も、面白がって見ている、自分を含めた名無しの大勢も怖い。

「袋叩き社会」・・・そんな言葉が頭の中をよぎった。

今や、非があると見なされれば、インターネットを通じて、日本のみならず世界中からバッシングを受けてしまう世の中だ。たとえそれが、根拠のない未確認の情報だったとしても、人の弱みを無責任な匿名の多数が掘りおこし、人目にさらし、拡散する。さらにはいくつかの情報を結びつけて意味づけ、ターゲットをさらに叩きのめし、引きずり下ろし、勝ちどきをあげる。

これは、正義の名を借りた私刑（リンチ）だと僕は思う。

そういえば、僕にもこんな経験がある。

僕はもともとスポーツがあまり得意ではない。それがゆえに、チームスポーツでミスをして、チームに迷惑をかけてしまうことが多々ある。

自分が悪いのは確かだが、だからといって、「おいおいお前。」とか、「なにやってんだよ！」といった言葉で一斉に責められると悲しくなる。

逆にこのような経験もある。小学校の頃、発表会に向けて合唱の練習をしている際、どうしてもうまく歌えない仲間がいた。何度もアドバイスをしたが良くならず、つい皆で責めたてる形になってしまった。その中に、僕も加わっていた。そのときは、ひどいことをしている自覚はなかった。むしろ何だか高揚感すらあった。

彼は言い訳をした。嘘が混じっていた。僕らはその嘘を見抜いて彼に突きつけた。彼はもう何も言えなかった。その時、僕には相手を言い負かしたことによる優越感があった。

もし、本当に当人に非があるとすれば、確かに悪いのは当人ということになるのだろう。

だが、そこで僕は、自分が責められたあの試合を思い浮かべる。皆に責められ、自分が悪いので言い返すこともできず、ただ怖く、辛かった。

このように、人は正しい事をしていると信じている時、ことさら強気になる。その信念が、正義という名のリンチを、さらに煽っている。

人の嘘を見抜いた時の達成感も、この正義のリンチの原動力のひとつだろう。

袋叩きは、なぜこんなに拡がるのだろう。

今やインターネットの発達で、動画投稿サイトやインターネット上のコメントを通じて、匿名での書き込みが無責任にいくらでもできてしまう。人の弱みを、ひたすら掘りかえし、大勢の目にさらす面白さは、袋叩きが拡散する要因である。

僕には、「袋叩き社会」を何とかしたいという思いがある。でも僕一人の力ではどうにもならない。

僕の経験から考えると、確かに人を陥れるのは楽しいし、悪気だってそれほどないだろう。さらに、相手に非があり、匿名で攻撃できるとなればなおさらだ。自分のコメントを皆が評価をしてくれる。もはやとどまるところを知らない。

でも、そこでとどまるべきではないのだろうか。

人は誰でも尊重されるべきだ。僕がしたように、また、僕がされたように、誰かを面白半分に袋叩きにすることは、やめなければならないと思う。

僕は、相手を尊重する勇気が持てる社会を考えていきたいと今は思っている。

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

こころのバリアフリー

横浜市立日野南中学校　二年
野下茉花（のしたまな）

「茉花は何年生になった？」
「中学二年生だよ。」
日常の他愛ない会話だと人は思うだろう。しかしこれが一日の中で八回目のやり取りだというと、事態は一変し驚かれるかもしれない。
私の祖父は、私が歩き始めた頃からよく一緒に手をつないで散歩にも連れて行ってくれた。今でも毎日数時間の散歩が日課で、家族の誰よりもタフでとても若々しい。
その祖父が数年前から、タクシーに携帯を忘れたり、大切な鍵やカードをしょっちゅう失くしたり、人との約束を忘れるようになった。
一日に何度となく
「新聞は買ったか。」
「銀行の通帳はどこにやったか。」
など言うので、祖母はその都度答えなくてはならず、とても大変そうだ。

私が今まで映画や本などで知っていた認知症という病気は、家族の顔や名前がわからなくなったり、自宅がわからず迷子になったり、最後には自分のことすらわからなくなってしまう、想像もつかない恐い病気という印象だった。

私は正直、祖父のことを作文に書いても良いか迷った。何故なら日頃から祖母が祖父の病気のことを「人様に言ったらおじいちゃんが可哀想。周りに伝えたら、おじいちゃんへの接し方も変わってしまいそう。」と言っていたからだ。認知症は私が思う以上に、デリケートで切ない病気なのだと思う。だからこそ身内で抱えこんでしまう家庭も多いのではないだろうか。

現在、全国に認知症患者は約四百六十万人いると言う。昨年、厚生労働省は全国で認知症になる人の数が、二〇二五年には六十五歳以上の高齢者のうち、五人に一人が認知症になる計算と発表した。

五人に一人、この先誰にとっても他人事とは言えない数値だと思う。

認知症というと、全てわからなくなってしまう気の毒な病気と思う人も多いかもしれない。しかし初期や中期だと見た目にはわからないし、普通に日常生活を送れている。認知症は発症しても、人によって進行速度や症状も様々だからだ。

だからこそ本人は心細く苦しんでいても周りは気づきにくいし、周りの家族もしんどくなる。オープンにしていないと尚更、本人や家族は孤立していってしまう。

では何故オープンにしづらいのか。認知症をどこか他人事と思い、正しく知ろうとする人がまだ少ないこと。忘れていったり、できないことが増えると、本人の尊厳が消えていくようで、隠してしまう家庭が多いのかもしれない。

しかし認知症になったからといって、人生が終わってしまうのではない。段々と日常生活で不便なことも増えていくかもしれない。社会との距離も出てきて、外出しなくなったり、そのうち家族はおろか自分のこともわからなくなるかもしれない。それでも人は命ある限り人生を豊かに過ごし、幸せになる権利があると思う。私も祖父には毎日笑っていてほしい。

先日、学校で「認知症サポーター中学生養成講座」が開かれた。認知症を知ろうをテーマに、認知症になると起きること、その症状と接し方など色々な話があった。私は祖父と照らし合わせながら心の中で、

「そうなんだ。そうは言っても難しい。」

など思いながら聞いていたのだが、その中でとても印象的なフレーズがあった。

「こころのバリアフリーを。」

認知症の人は自分の障害を補う「杖」の使い方を憶えておけない。だからこそ認知症の人への援助には、認知症を理解し、さりげなく援助できる「人間杖」が必要だということ。私は、人間杖という言葉が胸に響き、杖になるにはまず認知症という病気を皆が身近なことと捉え知ることが大事だと痛感した。そして私も祖父の人間杖になりたい。これからも祖父が自分のペースで自立した生活を送れるよう、容易ではないかもしれないが、家族みんなで、模索しながらサポートしていきたい。

運動会でソーラン節を踊った私を、大勢の中から誰よりも早く見つけ、声援を送ってくれたこと、一緒に色々な所に行ったこと。共有してきた沢山の時間や想い出は、私がしっかり覚えている。祖父が道を忘れたら、小さい頃私の手をひいてくれたように、今度は私が祖父の手をひいて歩こう。

「茉花は何年生になった？」

祖父が私の名前を呼んでくれるなら、私は何度でも答えよう。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

一人ひとりの人権

横浜市立釜利谷中学校　二年
佐々木（ささき）　可（か）帆（ほ）

毎日の生活の中で、いじめはたくさんあると思います。私にとっていじめは関係ないことだと思っていました。私は人を傷つけないことには自信がありました。自分が嫌なことは人にしてはいけないと心がけていたからです。ですが、いじめはたいていしてしまっている人は、気づかないのだと思います。言葉も態度も暴力になることが分かっていなかったからです。

小学生の時私のクラスには、なかなか意見の言えない子がいました。先生に名前を呼ばれただけで、だまってしまい最終的には泣いてしまって、彼女の意見を聞けることはありませんでした。初めの頃は、泣くほどのつらいことがあるのかと思いましたが、それが何度も続くと、「自分の意見がないのかな？」と思い、少しずるいなと思っていました。彼女は普段教室で楽しそうにしているし、一人ぼっちでいることはないので、意見を求められて泣いている姿を見ても心配する気は少しもおきませんでした。

ある日、私は人権委員会で、クラスのいじめのことについて話し合った意見をまとめてクラス代表として委員会に参加しました。集計した意見を発表するだけでしたが、私は上級生の前で話すのがとても緊張するので、嫌でした。ですが今回は私の番で仕方なくプリントを読み上げましたが、上級生に急に質問され答えられなく

なり、みんなに心臓の音が聞こえてしまうのではと思うくらいドキドキして上級生がにらんでいるように思えて、こわくなり、顔もあげられなくなりました。先生が助け舟を出してくれるまですごくすごく長い時間に感じられました。帰り道で、一緒に参加していた同級生に「どうしてだまっちゃったの？」と聞かれて私はハッとしました。それは、私がいつもクラスメイトに問いかけていた言葉だったからです。あの時みんなの前で、先生に指されて、何も言えなくなった彼女の気持ちが痛いほど分かりました。家に帰って私は自分のしていたことの恥ずかしさで誰にも言えませんでした。いつも私は人の嫌がることをしないと思っていたけれど、自分のできることや、自分が正しいと思っていることをできない人を、無意識に否定していました。その時初めて私は、自分勝手だったということに気がつきました。私は間違ったことをしなければ、いつも自分が正しいと思っていました。けれど人間は状況や立場によって感じ方も違うし、得意、不得意があります。ついつい自分のものさしで、良い悪いを決めつけがちです。相手の立場に立つことは、とても難しいです。とくに自分が感情的になっている時は、思いやりあえません。

いじめをなくすには、相手を認めることからだと思います。自分と違う意見の人と、とことん話し合ってお互い深く知り合えるようにすればいいと思います。そして、それでも分かり合えないと思ったら、自分とは違う人間なんだと認めあいましょう。疎外するのではなく、攻撃するのでもなく、違う意見を持った人間なんだということを認めあいましょう。それが一人ひとりの人権を守ることなのだと思います。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

弟の気持ち

横浜市立南高等学校附属中学校　二年
神明（しんめい）　杏（あん）

当時小学一年生だった弟の体力テストの結果を見て、私は頭を抱えてしまった。弟の五十メートル走のタイムが、十六秒なのだ。私が小学一年生のときは十秒だった。六秒もの差がある。それだけではない。シャトルランや反復横跳びなど、ほとんどの種目で平均より大きく下回っていた。弟はかなりの運動音痴なのだと私は思った。

それからしばらくして、弟は県立の子供病院へ検査をしに行った。そのときの私は、あまり深く考えていなかったと思う。しかし、検査の結果、骨の病気だと判明。しかも先天性のものだった。

きっと何かの間違いだ。私をそう思わせたのは、弟の日常生活だ。運動ができないということを除けば、何の支障もない。しかし弟は先天性の扁平足でもある。弟の運動能力に悪影響を与えていたのは、先天性の骨の病気と扁平足であると分かった私であったが、代わりにもやもやとした感情が生まれた。

弟は足が疲れないように、くつの中敷をオーダーメイドのものにした。具体的には、本来土踏まずを置く部分に、高さを加えたのだ。すると自然に、足の裏が押し上げられ、土踏まずと同じ役目をするらしい。効果はすぐに出た。学校からの帰宅に一時間かかっていたのだが、四十分で帰宅できるようになった。また、どこか

へ遊びに出かけると弟は、「足が痛い。」と言っていたが、その回数が激減したのだ。その度に弟は満面の笑みを見せる。私は弟のそんな姿を見ると、なぜかほっとしていた。

しかし、進級してすぐのある日、弟の笑顔は消えていた。その理由を弟に聞くと、縦割班の先生が担任の先生だと分かったからだという。そんな小さなことで落ち込む弟を、私は馬鹿らしく思った。だが、弟が落ちこんでいる理由は私の予想と違った。小学校の縦割班で弟は毎年、担任の先生が、担当の先生なのだ。他のクラスの先生より担任の先生の方が、弟について分かっているからだ。学校側の弟への配慮だと母は言う。しかしこれが、弟が落ち込む理由のようだ。始業式で担任の先生が発表されたときから、縦割班の先生も分かってしまう。普通、四月後半になって発表される縦割班。友達と一緒にドキドキやワクワクを楽しみたいらしい。また、担任以外の先生と接する機会も減るという。

私は弟の意見を聞いて、考え方が少し変化した。障害者だからという理由で区別してはいけないのだと感じた。その区別というものが配慮であっても、受ける側のプライドを傷つけていることがある。身体に何か、ハンデがあったとしても、それは個性であり、ひとりの人間だということを忘れてはいけない。

しかし、同じように生活していく中でやはり限界がある。弟は上手くジャンプすることができない。そのため、学校の縄跳び大会では、いつも友達の足を引っ張ってしまう。弟はそのことが気にかかっていた。だが、縄に入るタイミングや跳ぶ方法を、クラスメイトが嫌な顔をせず教えてくれたらしい。だから弟は、失敗を恐れることなく、縄に入れたという。弟をありのまま受け入れてくれる友達がいることに、私は安心した。そして今まで胸の奥にあったもやもやが、吹き飛んだ気がした。

小学四年生になった弟は、足が痛いと訴えることはほぼない。しかし病気により、身長がなかなかのびない。

また、五十メートル走のタイムは十六秒。そんな弟でも、少しずつ、少しずつ、成長している。障害と向き合って生きる弟の心は、私より大人なのかもしれない。

弟に障害があると発覚してから、私はとても大切なことをたくさん学んだ。障害者への配慮は、時に本人を傷つけてしまうこと。しかし、本人の限界を感じたら、手を差し伸べてほしいこと。私は特に、この二つのことをより多くの人に伝えたい。そうすることが、障害者差別を無くす第一歩であると考える。そして、障害を持つ弟の姉としての、第一歩でもあると思う。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

「人の幸せ」を支える

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校　三年
宮下（みやした）　ひな乃（の）

私には、今でも忘れられないことがあります。それは、医療センターで初めて重病心身障害者の方々とお会いした時のことです。部屋に入ると、そこには何人もの障害者の方が横になっていました。声も発さず、表情も変わらずに寝たきりの人や、ストレッチャーに寝てスタッフの方に食べ物を口に運んでもらっている人、また、様々な医療機器を体に付けている人など、そこには今までに見たことがない光景が広がっていました。

私は幼い頃から障害者の方々と関わる機会が多くあります。なぜなら、母が音楽療法の仕事をしていて、私もボランティアとして同行することがあるからです。音楽療法とは、音楽を聴いたり演奏したりすることで、心身の健康の維持や回復、向上をはかる事を目的とするもので、高齢者、発達障害者、身体障害者、幼児などを対象とします。今まで私が出会ったことのある障害者は、自閉症やダウン症の人がほとんどで、言葉を発したり、自ら動けたりしていました。なので、医療センターで見た重症心身障害者の方々にはとても驚いたのです。

母が活動開始の挨拶をしましたが、利用者の方々の表情の変化が分かりません。スタッフの方たちがとても上手にその場を盛り上げてくれますが、それに対しての反応も私には見えませんでした。その時私は、この方たちは音楽の時間が始まるということを理解しているのだろうかと思いました。歌唱活動や楽器活動を行った

後に、

「次は、私の娘がクラリネットを吹きます。」

と母が言いました。私はこの日、習っているクラリネットを演奏するために来ていたのです。私はこの方々が私の音を楽しんでくれるか、とても不安でした。そんな気持ちで私が吹き始めると、私の一番近くに寝ていた女性が体を動かし、口を開いて歯を見せる仕草をしてくれました。後から聞くと、その仕草は彼女が心地良く感じたり、物事を肯定的に捉えたりした時に行う動作だったのだそうです。この時、彼女が私自身や演奏に対して精一杯の反応を示しながら、音楽を楽しんでいるということを表現してくれたのが分かって、とても嬉しかったです。彼女だけではなくその周りの人たちも、声を発したり目を開けてこちらをじっと見つめたりしてくれて、その場の空気が変わったのを感じました。

このことから、この方たちは本当に小さくわずかな反応しかできないけれど、様々な気持ちを持つということは私と同じであるということを知りました。障害を持つ人と関わるということは、例え瞬き一つ、指一本であろうと、その人が発信しているサインを読み取ることが私たちには必要であり、それがその方を理解する第一歩になると感じました。どんなに重い障害を背負っていても、誰だって皆同じ「人間」という生き物であり、無二の存在です。誕生したその瞬間から生きる使命を受け、その人だけの人生を一生懸命に生きています。だから、自ら身体を動かすことが困難だったり、知的な発達が遅れていたりする人でも、一人の人間として幸せに生きていく権利があります。そして、人の「幸せ」は他者と比べることができません。その人がより幸せな時間を過ごすために、もっと私にできる支援があるのではないかと感じました。今回の医療センターでの経験も、私はスタッフの方々の力の大きさというものを強く感じました。利用者の一人一人に笑顔で話しかけ、普段と

違う様子をしているとすぐに気付いて対応をし、わずかな反応にもしっかりと答えていました。その姿はまるで、その人の第二の身になっているようでした。母はこう言っていました。

「スタッフの方たちは、時には利用者の方々の手となり足となり、言葉となる大切な存在だよ。」

その人自身を表現できるスタッフの方たちが、私にはとても輝いてみえました。

これからも様々な障害者の方々と関わり、同じ人間として役立てるようになりたいと思います。そしていつかは、医療センターで出会ったスタッフの方々のように、障害者の方々の第二の身の存在になれたら嬉しいです。そのために今は、自分にできる限りの支援として、またボランティアに伺います。きっと私の演奏を待ってくれている人がいることを信じて。

最優秀賞（横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞）

誰もが出来ること

横浜市立十日市場中学校　一年
大島（おおしま）　沙羅（さら）

ある日、父が洗い物をした。洗い物を終えたあと、父はあたり前のようにこう言った。

「洗い物しておいたよ。」

私はこれを聞いたとき、ふと思った。「この言葉は本当に必要なのだろうか。」と。

いつから、家事は女性の仕事になったのだろう。「日本では男は仕事、女は家事・育児買い物」に専念して家庭づくりにはげむ。といったイメージが、一九五〇年頃から既婚女性の専業主婦である状態が大勢を占め、性別役割分担が広まった、とある。確かに昔は、女性の労働力も少なく、家にいる事が多くあった為、この様な言葉があったとしても不思議ではない。でも最近では、女性の社会進出が増え共働きが増加し、夫婦間での役割が見直されつつあると聞いた。しかし、女性の就業率は進んでいるが、男性の家事分担はそれに対応するほどには進んでいない様に感じる。実際私の家では、家事を誰がするかは決まっていないのにもかかわらず、いつも母がやっている。父は仕事、母は仕事と家事をしており、たまに父がする家事、「洗い物や洗濯物」は、一つ作業を終えると、

「これ洗っておいたよ。」

「洗濯物しまっておいたよ。」
と、必ずと言っていい程、報告をする。
私は、そこで一つの疑問を抱いた。どうして父は報告するのか。母が同じ事をしても、母は報告をしない。自分の中で考えた。きっと母は、家事をあたり前の事だと思っている。それに対し、父はあたり前とは思っておらず、「してあげた、やってあげた。」という気持ちの方が強いのではないか。私は父に直接言う事ができなかったが、自分から何かを変えたいと思い行動にうつした。夕食後の洗い物をする、洗濯物をする。すると、母からは
「ありがとう。」
の言葉が、父からは、
「偉いね。」
との言葉が返ってきた。父の言うことに対し偉くはないと思った。なぜなら、誰がやっても良いものだから。あたり前だとは思わない父に、どうしたら分かってもらえるか。というのが、私の課題となりそうだ。
私は、この世の中が全てにおいて、男女平等になってほしいと思う。そうなる為に、今自分に出来ることから、少しずつ始めていきたい。身近なことからやることで、世の中が少しでも変わると信じて。

最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

「起立性調節障害」を知っていますか

横浜市立軽井沢中学校　三年
鴨野亜季子（かもの あきこ）

「起立性調節障害（以下ＯＤ）」、この言葉を聞いたことがある人はどのくらいいるだろうか。

中学校一年生の二学期が始まって間もなく、私は突然、強い吐き気と頭痛に襲われた。布団から起き上がることすら困難な辛い日々がその後ずっと続いた。体調不良のまま四ヶ月後に、三つ目の病院の検査の結果、「ＯＤ」と診断され、私は初めてこの病気を知った。

急激な体の成長に伴い自律神経が不安定になる思春期に多い体の病気で、軽症を含めれば中学生全体の一割が該当するとの研究結果もある。

健康な人は、急に立ち上がったり、長い間立っていても自律神経の働きで、立ち上がる→下半身の血管が収縮する→血液が上半身に押し上げられる→体中に血液が循環する。

しかし、ＯＤの場合は自律神経の乱れのために、立ち上がる→下半身の血管が収縮できない→血液が下半身に溜まる→脳が血液不足→立ちくらみ・脳貧血、ということが起こってしまう。患者の大半は、成人すると体と自律神経のバランスが整い、症状が出なくなるようだ。治療法は、まだ確立されていない。

人により、程度・症状は様々なのが特徴で、私の場合は朝に起きられない、立ちくらみ、全身倦怠感、食欲

不振、動悸、頭痛、集中力低下が現れた。現在は回復傾向中なので、幸いこの作文を書くことができる。

どうも私は重症だったようだ。寝たきりの時期もあり、一年以上、学校はもちろん、ほとんど外出ができなかった。

朝、起きたくてもだるくて起きられず、学校へ行きたくても行けず、友達と話したくても話せず、大好きなバレー部の活動にも参加できず、心身共に辛かった。正直、本当に弱っていて当時の記憶はあまりない。ただ、やっと夕方に起きられて遅く登校したときに、バレー部顧問の先生と二人きりでやったパス練習は忘れることができない。たまにＬＩＮＥが友達から届いたことにも、私は救われた。とても嬉しかった。

徐々に体調が上向きになってきた中学校二年生の三学期に、負担の大きい電車通学をやめて近くの中学校に転校した。新しい担任の先生が事前に級友に病気について説明してくれ、皆も理解してくれた。体調が悪くなったとき、いつも心配してくれた。おかげで安心して学校に通い、朝から夕まで普通の学校生活が送れるようになった。部活でも、バレーボールをすることはまだできないので、マネージャーとしてチームの一員に迎えてもらえた。私は日々、笑顔で充実した生活を送れている。感謝の気持ちでいっぱいだ。

一方で、同じ病気の子供が周囲の無知・無理解によって大変辛く、苦しい思いをしているということを聞いた。学校を休むと「サボっている。」といじめられてしまったり、厳しい部活では「根性が足りない。」と言われ、朝に起きられないときは「気合いだ。」と親にしかられるそうだ。体がだるくて言うことを聞いてくれないのがＯＤである。さらにストレスが病状を悪化させてしまうそうだ。彼等の周囲の人々にＯＤについての知識・情報があれば良かったのに。胸が痛む。

翻えせば、私も知識がなく理解不足のせいで、弱っている人々に気が付いていないかもしれない。

私は幸い周囲の理解があり、回復傾向の今は時々肉体的に辛いが、毎日笑って過ごせている。しかし、世の中のＯＤ患者の中には周囲の理解が足りず、心身共に苦しんでいる人が大勢いる。そのような思いをする人がいなくなって欲しいので、まだ中学生の私には難しいが、高校・大学生になったらＳＮＳを利用してＯＤの情報を拡散したい。医療の世界でもっと知られれば、病気のデータが増え治療法が確立される可能性があると聞いた。世間に知られれば、ＯＤが原因になっているいじめがなくなるかもしれない。私はその日が来るまで尽力したい。

ＯＤだけでなく、立場が弱い人達のことを正しく理解できたら、その人達の力になれる。救うことができる。世界中の人々の人権を守るには「正しい理解」が大切だと、私は思う。

最優秀賞（横浜ＦＣ賞）

幸せの源

横浜市立東山田中学校　三年
髙部（たかべ）海音（かのん）

人の心の温かさこそみんなを幸せにする。私が三週間という短いようで長いこの期間で強く思ったことである。それは私がはじめて松葉杖を使って生活した期間である。

バレーボール部の朝練でケガをした私は、大泣きで保健室に車いすで運ばれた。保健室の先生は、私の異常にはれた左足の足首を見て、

「折れてるかもね。」

とおっしゃった。大会を控えていた私は不安になって、じっと座っているのもつらかった。その後すぐに病院に行き、大きく心臓が動くのをおさえながら診察室に行くとお医者さんは、

「折れてはないけど重いねんざだね。しばらくは松葉杖かな。」

とおっしゃった。この日から私の松葉杖生活は始まったのだ。

病院を出て外を歩くと通る人がみんな私を見てくる。その視線は私にとってとても怖かった。何を思われているんだろう、と気付けば私は周りの目ばかり気にしていた。

それから一週間たってだいぶ松葉杖にも慣れてきたころ、私は家の近くのスーパーに行った。階段をのぼっ

ていると私が遅かったので後ろの人がイライラしながらぶつかって抜かしていった。すごく嫌な気持ちになった。そしてその時、一つ思い出した出来事があった。

ケガをする前のこと、時間ギリギリで駅について急いで階段を降りようとしたら、目の前に松葉杖でゆっくり降りている人がいた。その人のことを私は一瞬だけれど「じゃまだな。」と感じてしまったのだ。

これはさっきの私の立場とまったく逆の出来事だ。私がされて嫌だったんだからきっとその人も同じ気持ちだったと思う。私は例え障がいがあっても一人の人間として、「じゃま」なんて気持ちは絶対に思ってはいけないと心に誓った。そして誰もが安心して気持ち良くすごせる環境づくりが大切だと思った。誰もが、というのは松葉杖を使っていた私を含めた障がいがある人たちもである。

最近ではユニバーサルデザインといって自動ドア、センサー式の蛇口、段差のないノンステップバスなどたくさんの工夫がされている。私も実際に松葉杖を使っている時は、段差がなかったり、自動のものはとてもありがたかった。でも何より周りにいるたくさんの人が過ごしやすい環境をつくってくれたと思う。学校に行けばクラスメイトが、部活に行けばその仲間が、家に帰れば家族が、私のためにどれだけ助けてくれたか。荷物を持ってくれたり、階段で支えてくれたり、確かに自動ドアもありがたいけれどそんなことより何百倍もありがたみを感じた。それは人しかもっていない心の温かさがあったからだと思う。私の周りにはこんなにも自分を思ってくれる人がいるんだと思うと、うれしくて胸がいっぱいになった。この人たちのおかげで私は毎日をとても安心して気持ち良く過ごせたのだと心からそう思った。

松葉杖生活が始まってから三週間。私はもうすっかり歩けるようになった。この期間でたくさんの人の温かさに触れ、私は変わった。どんな人にでも「優しさ」をもって接しようと思ったのだ。私は人に優しくされる

ことがどれだけ幸せなことなのか、身にしみて知った。だから今度は私はその幸せを届けたい。そう思って毎日をすごしている。

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

耳で聞く、目で見る

横浜市立谷本中学校　二年
中村（なかむら）　穂野香（ほのか）

私の父は東日本大震災が起きるわずか十一日前に、仕事のため仙台に単身赴任することになった。慣れない生活が十日間続いたその翌日、東日本は悲劇に襲われた。父がいた場所は内陸だったため、津波の被害は受けずに済んだ。が、その被害は甚大だった。父は、

「いつ止まるのか、いつ止まるのか、と思った。本当に長かった。地震が来たらまず机の下にとか言うけれど、これ程の大地震だと机ごと動いてしまって潜ることさえ不可能。棚なども引き出しが開くだけでなく、棚ごと倒れてきた。」そう言っていた。

月に一度私たちの住む横浜に帰ってくることになっていたので、荷物の半分はまだ家にあった。しかし、予想だにしなかったことが起きたため、三月は一度も帰ってこれなかった。四月に入って久しぶりに顔を合わせた。今までに見たことのないくらい、疲れ果てた顔だった。大震災が起きてから被災地はパニック状態。平穏な日々を送っていた街が、一瞬にして失われたのだから。

そして、私の心の傷はこの後起きたことによって生まれた。父が再び仙台へ戻った次の月曜日、父が無事だったことと被災地の現状を友達に話した。すると友達は、

「その話大げさすぎない？だって帰ってこれるくらいなんでしょ？」と言った。話だけ聞くと、確かにそうかもしれない。そんなに大変なのであれば、帰ってくることもままならないのではないか。そう考えるのも当たり前かもしれない。でも、本当に伝えたい状況が自分では伝えられない。その悔しさが涙となってにじみ出てきたとき私は、目で見て、耳で聞いて、肌で感じたいと思った。

その年の夏休み、私は家族で宮城県を訪れた。出かける前にグーグルマップで学校、コンビニ、スーパーなどを見た。学校は、雰囲気のある建物だった。しかし実際はなにもなく、人一人、虫一匹すらいないように感じる程しーんとしていた。地震発生から五ヶ月経ったあのときでも、道端には大きな船があり家屋は一階だけが空っぽ。海沿いに生えていた沢山の松は流木となって街中に。店の看板だけが残っていたり、電柱も折れたまま。何もかもが手つかずで、もはや街ではなかった。生まれてこのかた、あのような風景を見たことがなかった。いや、もう見たくないと思った。父は私をしっかりと見つめて、

「これが本当の状況だ。」と言った。

自然災害を未然に防ぐことはもはや不可能である。しかし、地震大国である日本は、今日までに起きてしまったいつくもの災害を教訓にして生かしていかなければいけないと、改めて考えさせられた。

その年の自由研究、私はこのことを題材にして写真などと一緒にレポートとしてまとめた。あのときの友達も読んでくれたようで、レポートについて話しかけてきた。その友達が言ったのは、本当に一言だった。

「私、何もわかってなかったよ。」

レポートを書いてよかった。分かってくれる人が一人でもいるのなら、と思った。私は涙が溢れ出そうになった。私のレポートの周りには、もっと楽しそうで興味をひくものが沢山ある。だから、読んでくれたのはその友達

だけかもしれない。けれど私はこれで十分だと思った。たった一人だけでも、被災地のことを知ってくれる人がいるのならそれで良いと。

私はこの経験を通して、イメージと見たものとには大きな違いがあるということを学んだ。実際に見るということの大切さも分かった。震災や人の痛みを正確に理解することの難しさと大切さを改めて感じた。

優秀賞

祖母から考える高齢者問題

横浜市立東鴨居中学校　三年
杉山由奈（すぎやまゆうな）

私は、生まれた頃から祖父母と一緒に暮らしています。他の家では祖父母と一緒に暮らしていないという人が多いのですが、小さい頃から知っている祖父母と暮らすことは私にとっては当たり前のことでした。家に帰れば出迎えてくれて、学校で嫌なことがあったら話を聞いてくれる。たまに叱られることもありました。そんな日々を送ってきた私ですが、ある日、祖母の足が不自由になりました。

最初は手すりや杖を使えば歩けていた祖母でしたが、そのうち車イス生活になり、普段の生活がうまく送れなくなりました。夜になると、寝返りがうてないことや足の痛みに悩まされ、眠れない日が続きました。自分に厳しい祖母は私たちに迷惑をかけないように自分が苦しくてもあまり口に出しませんでした。しかし、その事を知っていた母は祖母のことをとても気に掛け、毎日、私達の手伝いや仕事をやりそれに加えて祖母の手伝いをしていました。そんな忙しそうな母を見て祖母は

「申し訳ない、申し訳ない。」

と何度も言っていました。祖父はそんな祖母を見て悲しそうな顔をして、いつも励ましていました。

それから何日かして、病院の先生の話もあり祖母は介護施設に入ることになりました。施設では働き手が少

ないせいか、手伝ってほしい時にすぐに介護をしてもらえないことや話せる人が少なくおしゃべり好きの祖母にはとてもつらい状況になっていました。また、好きな物を食べることができず、他の部屋の人がうるさいなどのストレスも溜まっていました。しかし、父母はそんな祖母を気にして毎日施設に行き話を聞いてあげていました。私もたまに祖母に会いに行き、話していると話す前は悲しそうな顔の祖母が話しているうちに笑顔になり嬉しいのだなと感じることがありました。それでも、時々祖母は

「こんな体で生きていたくない。」

「もう嫌だ。」

と言う時があります。私は、この言葉を聞くととてもつらい気持ちになります。あんなに元気で弱音を吐かなかった祖母がここまで変わってしまうということ、私はこのことから一人で悩むのではなく家族全体で支えてあげたいと思うようになりました。そのためにはいつまでも施設に入れておくのではなくもう一度一緒に暮らすことが祖母の幸せになると強く思います。

近年日本は、少子高齢化により一人暮らしの高齢者や施設に入る高齢者が増えています。そういった高齢者の中には祖母のような悩みをもった人達が沢山いると思います。手足が不自由な人、一人で生きるのが大変な人、高齢者だけでなく介護をしている家族も悩んでいる人がいると思います。私達が今、出来る事は高齢者の悩みなどを共有し考えていくこと、地域全体で支えていくことです。そのためには日々の人との関わりを大切にする事が解決への一歩だと思いました。誰もが幸せに楽しく生きるためにも、高齢者問題について少しでも多くの人に耳を傾けてもらいたいと強く思います。

優秀賞

本当の不自由とは

横浜市立上永谷中学校　三年
鈴木　菜々子

私の祖母は、今から二年前、自宅から近くの特別養護老人ホームに入所しました。現在八十歳。たくさんの素敵なスタッフに囲まれて元気に暮らしています。

祖母は、先天性の聴覚障害を持ち、その上左半身の麻痺も重なり、多くの不自由を抱えながら生きてきました。父がよく語っています。「言葉の無い中で、生きてきたおばあちゃんは、とても苦労が多かったけれど、いつもいつも優しい笑顔一杯のおばあちゃんだったよ。」と。父を育てるといっても、それはとても大変だったと思います。父に聞きましたが、小さい頃から行政の福祉には大変お世話になったそうです。私はその時思いました。自分一人ではなかなか生きていくことが難しい、弱い立場の人を守ってくれる社会の仕組みがあるというのは、本当にありがたいことだと。私はこの福祉の体制に少しずつ関心を持ち始めました。

父が母と結婚してからは、主に母が通いながら祖父母の介護に務めました。私はまだ幼稚園に通っていた頃だと思います。その頃からなんと九年間も必死に通って介護にあたっていました。その姿が今でもずっと目に焼き付いています。そばで見ていたからこそ、介護の現場に触れる機会もたくさんありました。食事をはじめ、身の回りの掃除、オムツ交換、デイサービスの通所の準備や見送り、往診の際の付き添いなどなど、限りない

支援があることにびっくりしました。母が一人でやっていた時代もありましたが、要介護が進むに連れ、プロのスタッフの方々に応援してもらうことになりました。母に聞くと、地域包括支援という制度があり、担当のケアマネージャーと相談しながら、家事やオムツ交換などのヘルパーさんや訪問看護師さんに協力してもらうというのです。この時もまた、身内以外の第三者の応援があることのありがたさを感じました。それは、介護によって倒れることがないよう、母の為でもあると思ったからです。それから長きにわたって、介護のサポートを受けることになりました。祖父が他界してからは、祖母の介護をどのようにしていくか、両親だけでなく、家族で何度も話し合ってきました。思いがけず、我が家からすぐ近くの特別養護老人ホームに入所が決まり、あれから早くも二年が過ぎようとしています。

この施設でも、本当に親切なスタッフの方々に恵まれました。祖母の満足そうな笑顔がそれを物語っていると思います。私の身近に介護現場があったからこそ感じること。それは、誰かの手助けがなくてはならない人々の為にある社会福祉の仕組みを、更に充実させていくことの大切さです。私の祖母のように誰もが穏やかな日常が送れるよう、関わって下さる介護者をはじめ、共倒れしないように家族の負担の軽減や、介護を受ける方の受け入れ体制など、最優先に考え守ってほしいと思っています。

私は、祖母の存在があって、障害をもちながらでも、祖母らしく生きられる幸せの形を考えてきました。祖母は、身体は不自由であっても、決して心は不自由ではありません。むしろ、笑顔あふれる心の豊かさを感じます。これまでの介護サービスや施設での触れ合いを通し、温かく見守る目と、寄り添い関わることで、自分自身の心の豊かさにつながっていくと思います。

優秀賞

「普通」を捨てる

横浜市立南希望が丘中学校　三年
種石（たねいし）　まりあ

教会付属の幼児園を卒園した私にとって、教会は、キリスト教は、身近な存在でした。小学生の頃はほぼ毎週教会学校に通っていましたし、忙しくなった現在でも時折教会に足を運んでいます。いつでも温かく迎え入れてくれる、そんな教会が大好きです。ですが私は、自分が教会に通っていることをあまり周りには言えませんでした。変な目で見られるのではないかと怖かったからです。

どうしてそんな風に思ってしまうのでしょう。それは、私の周りは教会に行かないことが普通だったからです。普通の枠から外れてしまうことに、私は不安を覚えました。そして、それと同時に、どうして普通という言葉で人を分けるのだろう、という疑問を抱きました。

そんな私を励ましてくれたのは、一冊の本「だいじょうぶ三組」でした。この本の著者は、五体不満足で有名な乙武洋匡さんです。自身と同じ、四肢の無い赤尾槙之介が小学校の教員として働く一年間が描かれています。その中の一つの話が、私の心に深く残っています。

ある日の道徳の授業のテーマは「それって・・・ヘン？」。赤尾は子供たちに、普通であること、ないことについて考えさせます。

「じゃあ、フツーじゃない人の立場ってどうなるんだろう。みんなと違うからヘン。ひとりだけだからだめ。そういうことになるのかな。」

この担任の意見に対しては、子供たちの間から反論が相次いだ。

「それはおかしいよ。みんなと違ったって、別にいいと思う。その人はその人だもん！」

「その人だって、好きでみんなとちがうふうになったわけじゃないから、仕方ないよ。」

「いまの話だと、先生のカラダだってちっともフツーじゃないってことになるけど、でも先生は先生だし、全然ダメじゃない。」

少数派であろうが多数派であろうが、みんなが認められる社会になって初めて、平等だと言えるのではないだろうか。この本を読んで私はそう思いました。また、普通という言葉で人を分けるのは、ある意味自己防衛なのではと考えました。今の社会は、たくさんの差別やいじめがあります。誰かを普通じゃない、と分けないと、自分が普通でいられなくなる。そんな風に思ってしまうのかもしれません。だから、外見や宗教といったその人の事実だけで普通、普通じゃない、と分けてしまうこともあるのでしょう。

「平等」になれば、個性を大切にすることができ、自分に自信を持てます。必然的に差別もいじめもなくなるはずです。私たちはまず、相手を受け入れる努力をしなければなりません。もちろんすぐに差別が、いじめがなくなるわけではありません。でも、みんなが意識を変えれば、社会は必ず変えていけます。

普通でないことを恐れて個性を殺していたら、みんなが自信を失って、暗い社会になってしまうでしょう。

私は認め合える社会を目指し、自分から普通という壁を無くす努力をしていきたいです。なぜなら、私はそのままの自分に自信を持って生きていたいから。

優秀賞

「外見で決めつけるのは・・・」

横浜市立矢向中学校　一年
森山優凪（もりやまゆうな）

私は小さいころから周りの人より背がだいぶ大きいです。集合写真ではみんなより頭一つ分は出ていました。幼稚園に入ってすぐのころ、町の人からは「小学校何年生？」と聞かれるくらいでとくに問題はありませんでしたが、小学校に入学してからは一変しました。クラスの男子に、「デカ」「デブ」などと言われるようになりほとんど名前で呼んでくれる男子はいませんでした。そう呼ばれるのが嫌で毎日学校に行くのも嫌いになって、学校を休んだこともありました。それが当時、小学校四・五年生の時にテレビで放送されていたアニメの影響でさらにエスカレートし、「巨人」といわれるようになりました。好きでデカくなったわけじゃないし、そんなことを言われてもどうにもできないじゃん！と思い、とてもつらい日々を過ごしていました。デカくて何の意味があるの？からかわれる材料でしかない！と背が大きいのが嫌で嫌でしかたありませんでした。

しかし、その考えを変えさせてくれたのはバスケでした。ある日、私にバスケを教えてくれているコーチが「たとえどんなに技術があっても、たとえどんなにがんばっても背だけは手に入らない。これは、神様からのギフトだよ。むしろ喜びなさい。」と言われてその日から私の考えは変わりました。

実際にバスケのミニゲームをして私がゴール下に行ってリバウンドするといつも一番最初にボールにさわれました。その時は、とても気分がよく楽しかったです。ジャンプすれば誰よりも先にボールにさわれる、手をのばしてボールをもつと誰もとどかない。私は、背の大きいことに自信をもてるようになりました。今まで、嫌でしかなかった背の大きさがバスケでは、大事な武器になったのです。今までこんなにうれしかった事はありません。コーチや家族などが支えてくれたおかげで私はこんな経験ができたと思い、今でも感謝しています。

私は、これまで背が大きいことのせいでいろんなつらい思いや嫌な思いをしてきました。けれど、逆に背を活かすスポーツのバスケを始めたことで前よりは、前向きに物事を考えられるようになりました。このようなことを乗り越えるには、自分が前向きな気持ちになり強くなることも大切です。しかし、そもそも人の外見の悪口やあだ名などは、どんなにそんなつもりがなくても、どんなに相手が嫌がってなくても、たとえ小さなことでも、それがいじめや差別などにつながってきてしまうので、この作文を読んでそういうことはしてはいけない！という社会になっていけばいいと願います。

これから私は、どんなことでも前向きに考え自分が強くなることを忘れずに、この大きい背とも付き合っていこうと思います。

優秀賞

心を越えた架け橋

横浜市立笹下中学校　二年
林（りん）　榕（ろん）　艶（いえん）

「私は中国人です。」というといつもはずかしくなりました。私は小学校二年生の時、中国から日本に来ました。最初は日本人学校へ通う事はとても嫌でした。日本人とどう関わればよいか不安でしかたなかったのです。

日本人学校に通い始めた私は、みんなと違って、国語の授業はいつも国際教室という教室へ行く事になりました。日本語を一から教えてもらい、平仮名の練習をたくさんし、少しずつ分かるようになってきました。だんだん学校生活になれてきて、クラスでおにごっこをやった時の話です。私も入れてみんなで楽しく遊んでいましたが、だれかが途中でルール違反をしてしまい、みんなであつまって話合いが始まりました。ルールを変えるかで一人一人意見を言うことになってしまい、私はとても困りました。自分の番が来て、黙って立っていた自分がとても嫌でした。だれかが助けてくれるのではないかと思ったけれど、そのような子はいませんでした。きっと、外国人に対する違和感や接し方が分からないために、お互いに距離を感じていたと思います。その時から私は周りにいる人と距離をとるようになってしまいました。

そして、二年くらい経って、私は周りの人のように日本語がしゃべれるようになり、周りにいる子とも距離をとらないで、話すようになりました。なぜあの時の周りにいた人たちは今と違うんだろうと思いました。日

本語ができるかできないかそんなことは関係ないと強く心に思いました。その頃、私と同い年の女の子が中国から日本に来ました。私と同じクラスになり、先生に、

「なかよくしてあげて。」

と言われました。その時、その子は私にとって外国人でした。私は、二年前に私の周りにいた子のように彼女に距離を感じさせたくなかったです。彼女を一人の外国人として見るのではなく、一人の人間として見て、助けてあげたいと思いました。日本語ができるかできないのか、そんなことは関係なく、彼女の気持ちが分かるのは私だけだと思いました。そして私が彼女に対して思ったことも、二年前の周りの人たちが思っていた事なのかもしれません。

これで、なぜ今まで、「私は中国人だ。」と言う事をはずかしがっていたのか理解しました。自分が外国人だと認めた瞬間にみんなから違う態度をされて、距離をおかれてしまい、差別をされるのが嫌だったからです。

すべての人は、外国人だからといって、距離をおくのではなく、外国人として見るのでもなく、一人の人間として見ることが大切です。相手が困っていたら助けてあげること、同じ人として、生きていく者同士でもっとも必要なことです。

参加校紹介（140校）

■横浜市立

〔鶴見区〕
市場中学校
末吉中学校
鶴見中学校
寺尾中学校
矢向中学校
上の宮中学校

〔神奈川区〕
浦島丘中学校
栗田谷中学校
六角橋中学校
神奈川中学校
松本中学校
錦台中学校
菅田中学校

〔西区〕
老松中学校
岡野中学校
西中学校

〔中区〕
軽井沢中学校
港吉田中学校
横浜中学校
大鳥中学校
仲尾台中学校
本牧中学校
共進中学校
蒔田中学校

〔南区〕
南中学校
永田中学校
六ツ川中学校
藤の木中学校

〔港南区〕
港南中学校
上永谷中学校
笹下中学校
野庭中学校
港南台第一中学校
芹が谷中学校
日限山中学校
日野南中学校
丸山台中学校
東永谷中学校
南高等学校附属中学校

〔保土ケ谷区〕
岩崎中学校
保土ケ谷中学校
宮田中学校
岩井原中学校
西谷中学校
上菅田中学校
新井中学校
鶴ケ峯中学校

〔旭区〕
万騎が原中学校
希望が丘中学校
上白根中学校
左近山中学校
都岡中学校
旭中学校
南希望が丘中学校
今宿中学校
本宿中学校
若葉台中学校
旭北中学校
根岸中学校
浜岡中学校
汐見台中学校
洋光台第一中学校
洋光台第二中学校
森中学校

〔金沢区〕
金沢中学校
六浦中学校
大道中学校
西柴中学校
富岡中学校
富岡東中学校
西金沢中学校
並木中学校
釜利谷中学校
小田中学校
城郷中学校

〔港北区〕

新田中学校
日吉台中学校
大綱中学校
篠原中学校
樽町中学校
日吉台西中学校
新羽中学校
高田中学校

〔緑区〕

田奈中学校
中山中学校
十日市場中学校
鴨居中学校
東鴨居中学校

〔青葉区〕

山内中学校
谷本中学校
青葉台中学校
みたけ台中学校
美しが丘中学校
すすき野中学校
奈良中学校
緑が丘中学校
もえぎ野中学校
あざみ野中学校
鴨志田中学校
市ケ尾中学校
あかね台中学校

〔都筑区〕

中川中学校
茅ケ崎中学校
中川西中学校
都田中学校
川和中学校
荏田南中学校
田南中学校
東山田中学校
早渕中学校

〔戸塚区〕

大正中学校
舞岡中学校
戸塚中学校
境木中学校
豊田中学校
汲沢中学校
名瀬中学校
深谷中学校
秋葉中学校

〔栄区〕

本郷中学校
上郷中学校
桂台中学校
西本郷中学校
飯島中学校
小山台中学校
岡津中学校

〔泉区〕

中和田中学校
上飯田中学校
いずみ野中学校
領家中学校

〔瀬谷区〕

瀬谷中学校
原中学校
南瀬谷中学校
東野中学校
下瀬谷中学校
霧が丘学園中学部
盲特別支援学校
ろう特別支援学校

■その他

横浜国立大学附属横浜中学校
桐蔭学園中学校

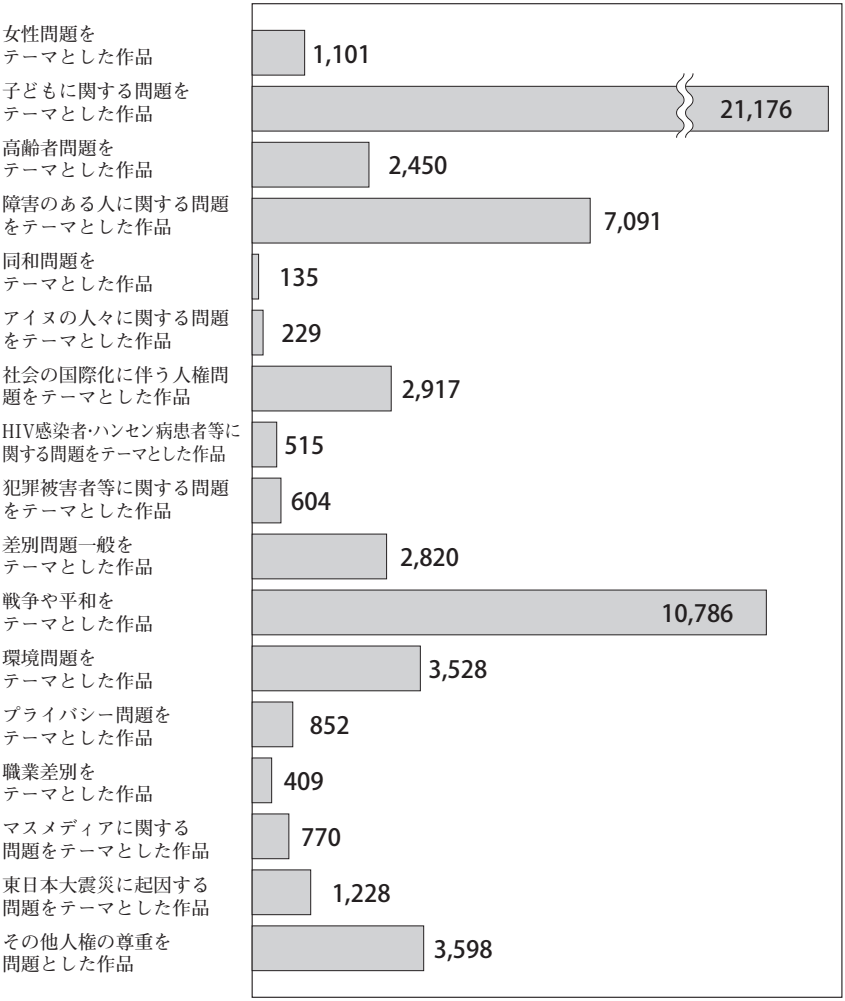
ご協力ありがとうございました。

●応募状況

【1】推　移

年度	22	23	24	25	26	27	28
応募校数	144	142	143	141	143	144	140
作品数	48,947	51,492	55,824	58,016	58,487	60,721	60,209

【2】テーマ別内訳



●平成28年度全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会

〈第一次審査員〉

横浜市立中学校教育研究会国語科部会の先生方　28名

〈第二次審査員〉

横浜市教育委員会事務局指導主事　10名

〈最終審査員〉

横浜人権擁護委員協議会会長	坂田清一
横浜市人権擁護委員会第一ブロック委員	新田弘子
横浜市人権擁護委員会第二ブロック委員	髙橋潤
横浜市人権擁護委員会第三ブロック委員	石井マサ子
児童文学作家	吉富多美
横浜市PTA連絡協議会会長	生田麻実
横浜市立中学校人権教育推進協議会会長	髙橋良裕
教育委員会事務局　健康教育･人権教育担当部長	伊東裕子
市民局人権担当理事	中村香織

●協賛

横浜DeNAベイスターズ
横浜F・マリノス
横浜FC
横浜ビー・コルセアーズ

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市内における人権啓発活動を、関係機関が協力のもとに総合的かつ効果的に推進するために平成12年9月に設立。

構成：横浜市・横浜人権擁護委員協議会・
横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

平成28年度
全国中学生人権作文コンテスト
横浜市大会作文集
平成28年11月

横浜市市民局人権課　TEL 045(671)2379
横浜市教育委員会事務局
人権教育・児童生徒課　TEL 045(671)3250